

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

アメリカ英語における談話標識 *Still* の分析 —談話の行為構造における機能とその史的発達過程の考察—*

岩井 恵利奈
青山学院大学大学院生

This paper takes an interactional view of the use of the discourse marker *still* and investigates how *still* functions in the action structure of the discourse, as well as how the functions have developed diachronically. Two uses of the marker are analyzed: the utterance-initial use and the stand-alone use. The utterance-initial *still* projects that, with the subsequent part, the speaker conflicts with the hearer's position by reclaiming the speaker's original position. However, the stand-alone *still* performs a similar action, and a stand-alone use involving "action projection" also exists. A diachronic analysis shows that *still* developed the stand-alone use out of the utterance-initial use. This is an example of a pragmatic expansion of the form into an item that both projects and performs the action.

キーワード： 談話標識 *still*、発話頭用法／独立用法、行為構造、行為投射／行為遂行、相互作用

1. はじめに

本稿では、談話における相互作用の観点から英語の談話標識 (discourse marker) *still*

* 本稿の執筆に際し、数多くの貴重なコメントと建設的なご指摘を下された 3 名の査読者の先生方と編集委員長・滝浦真人先生に厚く御礼申し上げます。特に、投射機能の論点と用例の読みについては主査の先生から、コーパスデータの分析や結果の提示方法については匿名査読者の先生方から、また、ポライトネスの論点と統計分析については滝浦真人先生から大変有益なご指摘やご教示をいただきました。そして、研究を進める段階から本稿執筆に至るまでご指導をいただきました小野寺典子先生、また執筆を進める過程で有益なコメントとご助言をいただきました大堀壽夫先生に心より感謝申し上げます。筆者は 2016 年度に Visiting International Research Student (VIRS) としてプリテッシュコロンビア大学に滞在し、その間、本研究を進める過程でレスリー・アーノヴィック先生とローレル・J・プリントン先生よりご指導を賜りましたこと、そして当大学大学院生の廣田友晴氏から本稿執筆の過程で貴重なコメントをいただきましたことをここに記し、心より感謝申し上げます。

本稿の内容の一部は、日本語用論学会第 18 回大会における口頭発表を基にしている。本稿は、JSPS 特別研究員奨励費 (課題番号: 15J10738) の助成を受けている。本稿における不備や誤りは、すべて筆者に帰する。

を分析する。例えば、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, seventh ed. (以下 OALD) (2005) では、副詞 *still* の以下 3 つの語義が与えられ、例文が掲載されている。

- (1) 1 continuing until a particular point in time and not finishing: *Mum, I'm still hungry!*
 - 2 despite what has just been said: *The weather was cold and wet. Still, we had a great time.*
 - 3 used for making a comparison stronger: *The next day was warmer still.*
- (OALD, s.v. *still*, adv.)

1 は時間的継続の意味、2 は譲歩（反意）の意味、3 は比較級を強める意味である。1 は時間的、2 と 3 は非時間的といえる。また、Michaelis (1993) は、もう 1 つの非時間的意味として「周縁性 (marginality)」を挙げている（例えば、*Death Valley is still in California* (ibid.: 193)）。¹ *Still* はこのように 3 つあるいは 4 つの基本的意味を持つが、この中で談話標識として用いられるのは譲歩（反意）の *still* である。

談話標識 *still* は (2) のように発話頭で用いられることが圧倒的に多い (cf. デクラーク 2011: 316-317)。²

- (2) Adam: *Still, I should have done it.*
(*All My Children* 2009 *The Corpus of American Soap Operas*)

Still は後続部（観念あるいは中核節：*I should have done it*）を伴っており、それから統語的・韻律的に離接的である。一方で、(3) のような独立して使用される例も少なくない。

- (3) Sandy: He brought that on himself.
Tammy: *Still.*
(*Guiding Light* 2005 *The Corpus of American Soap Operas*)

この *still* は後続部を伴っておらず、一語文のように用いられている。これは統語的・韻律的に独立した使用である。³ 本稿では、(2) と (3) のような使用をそれぞれ「発話頭用

¹ Michaelis (1993: 94) は、周縁性 (marginality) の意味に初めて言及したのは、ドイツ語の *noch* を分析した König (1977) であると指摘している。

² デクラーク (2011) は、(談話標識 *still* に相当する) 接合詞 *still* は「通例、節前位置に生ずる」(ibid.: 316) と述べている。なお、デクラーク (ibid.) は、*still* は「節後あるいは文末には生じえない」(ibid.: 317) と指摘しているが、追って述べるように、本研究データにおいて数は少ないが発話末の使用も見つかった。

³ Fraser (2009: 300) はまた、談話標識は S1-DM+S2 (S は談話断片、DM は談話標識) の連鎖に現れるが、S2 が産出されず談話標識が単独で用いられる場合があると指摘する。

法」「独立用法」と呼ぶことにする。なお、この他に発話末での使用も観察されたが、用例数が非常に少なかったこと、また紙幅の都合により、本稿では上記2つの用法に限定し分析する。本研究では、各用法の *still* が談話においてそれぞれ持つ語用論的・相互作用的機能を示す(3節)。

Schiffrin (1987) は、談話 (discourse) は複数の面 (レベル) から構成されると説明する。図1は Schiffrin (ibid.) の提案する「談話モデル」である。

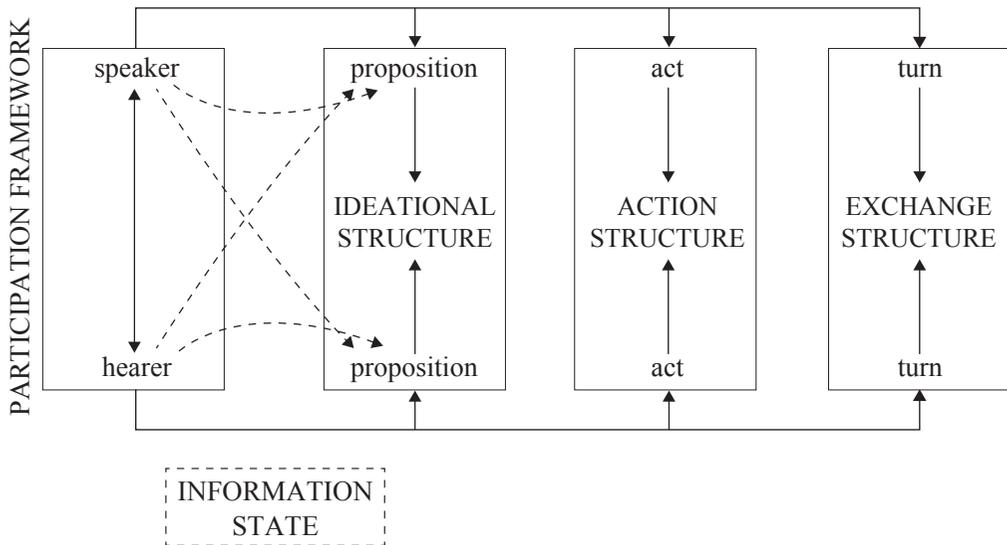


図1: Schiffrin (1987: 24-29, Figure 1.1) の談話モデル

複数のレベルとはつまり、(i) 参加者構造 (participation framework)、(ii) 観念構造 (ideational structure)、(iii) 行為構造 (action structure)、(iv) やりとり構造 (exchange structure)、(v) 情報構造 (information state) という5つの性質・次元の異なる面 (plane、また structure) である。⁴ 談話におけるメッセージやコンテキストは談話の複数の要素が相互に関連しあい成り立っている。この中でも、本稿が焦点を当てるのは「行為構造」である。行為構造は、「行為 (act)」が単位であり、それには対話者の発話行為や社会的行為 (エスノメソドロジーが言うところの行為) が含まれる (Schiffrin 1987: 25; cf. 澤田・小野寺・東泉 2017: 19)。談話において行為は無秩序に起こるのではなく、そこには制約があり、関連づけられたものとして解釈される (Schiffrin ibid.)。本稿では、談話標識 *still*

⁴ 談話モデルの詳細については Schiffrin (1987: 24-29) を参照のこと。なお、ここでの日本語訳は澤田・小野寺・東泉 (2017: 19-20) を参考にした。また、談話の多面性については他の先行研究でも指摘されている (e.g., Borkin 1980; Grosz and Sidner 1980; Halliday and Hassan 1976; Polanyi and Scha 1983; Redeker 1990)。

の行為構造における機能を分析する。

近年、「周辺部 (periphery)」研究が盛んに行われるようになってきている (e.g., Beeching and Detges 2014; 小野寺 2017a)。周辺部とは、「談話ユニットの最初あるいは最後の位置」(トラウゴット 2017: 86) と定義され、「談話ユニット (discourse unit)」とは通例、節または発話を指すことが多い。周辺部は、「語用論的調節のなされる場所」であり (澤田・小野寺・東泉 2017: 20; cf. Ohori 1998: 194; 小野寺 2017b)、文法化が起こる場所であるとも指摘されている (e.g., Ohori 2000; 小野寺 *ibid.*)。周辺部研究の一環として、小野寺 (2014) は、左の周辺部に生起する談話標識には、「これから起こる話し手の行為⁵ を知らせる」機能があると提案する。これは (2) の *still* に関係すると考えられる。また、Higashiizumi (2016) は、日本語の連結詞 *dar(o)/desho(o)* が、節の右の周辺部から分離し、「独立した承認/同意のマーカー (stand-alone confirmation/agreement markers)」として使われるようになる変化を明らかにしている。こうした論考は (3) のような用法を考える上でも参考になる。また、大橋 (2015) は、譲歩の意味を持つ語や構文が新しい用法や意味を発達させるプロセスを実証している。本稿も「譲歩からの変化」に取り組む一研究として位置づけられるだろう。

本稿の目的は、アメリカ英語を対象とし、相互作用的观点から談話標識 *still* (発話頭用法と独立用法) の行為構造における機能を明らかにするとともに、その機能の史的発達過程を考察することである。具体的には、談話標識 *still* は発話頭用法と独立用法とで異なる行為構造における機能を持つこと、そしてそれらの機能は歴史的に段階を経て獲得されてきたことを示す。近年、相互作用の中での言語使用のパターンが新たな構文 (construction) (Traugott 2003) を生み出していく事例が報告されている (e.g., Couper-Kuhlen 2011; Günthner 2016)。しかし、相互作用の观点を重視した通時的語用論研究を行おうとする際、過去の話しことば (音声、自然な (authentic) 相互作用) データの欠如が問題となる。本稿は、*The Corpus of American Soap Operas 2001-2012* (以下 SOAP) と *The Corpus of Historical American English 1810-2009* (以下 COHA) の2つのコーパスを用い、それらから得られる「話しことばの書かれた記録」(Rissanen 1986, Jacobs and Jucker 1995: 7 より引用) の分析を基に相互作用的观点からの通時的語用論研究を試み、その一ケーススタディを提供する。

本稿の構成は、以下の通りである。2節では、談話標識 *still* を定義し、具体事例の分析の背景として譲歩を表す *still* が持つ機能を先行研究により概観する。3節では談話標識 *still* の行為構造における機能を明らかにし、4節ではその機能の史的発達過程を調査する。5節では結語を述べる。

⁵ この行為には、発話行為、社会的行為、会話管理のための行為が含まれる。

2. 研究の背景

2.1. 談話標識 *still*

譲歩（反意）の *still* は、Quirk et al. (1985)、Halliday and Hassan (1976)、Biber et al. (1999) に従えば、それぞれ「接合詞 (conjunct)」「接続詞 (conjunction) あるいは接続要素 (conjunctive element)」「連結副詞類 (linking adverbial)」として分類することができる。それは、前後の談話ユニットが「予想に反して (contrary to expectation)」という意外さや驚きを含んだ対照関係にあることを示す (Quirk et al. 1985: 631; cf. Quirk et al. 1972: 164)。このようなメタテキスト機能を持つことから、*still* を「談話標識 (discourse marker)」(Fraser 1996, 2009; cf. Bell 1998, 2010) として捉えることができる。さらに、それは伝達事象に対する話者のスタンスを示すことから、メタ語用論的（対人関係的）である。トラウゴット (2017: 77-78) は、メタテキスト的、メタ語用論的、あるいはメタテキストのかつメタ語用論的である項目を「語用論標識 (pragmatic marker)」と定義しており (cf. Brinton 1996; Fraser 1996, 2009; Hansen 2008)、*still* は語用論標識と言うこともできる。

Schiffrin (1987) は、ある形式が談話標識として用いられる際に見られる条件として、以下4つを挙げている。

- (4) 1. 文から統語的に分離可能である。
2. 典型的に発話頭で用いられる。
3. 一連の韻律曲線を持つ。
4. 談話の局所的レベル (local level) と全体的レベル (global level) で、また異なる談話の次元で作用する。

(Schiffrin 1987: 328 [訳筆者])

本稿では、上記1-4の特徴を持つ譲歩 *still* を談話標識 *still* と定義し分析する。

2.2. *Still* の機能

以下で、*still* の主要な機能を3つ確認する。最初の2つは、「受容 (accept, acknowledge)」の機能と「打ち消し (cancel) を知らせる」機能である。Bell (1998, 2010) は、*still* を “concessive cancellative discourse markers” の1つとして特徴づけ、それが以下2つの特性を持つと指摘する。

- (5) 1. 先出の談話断片の正当性や妥当性を受容する。⁶

⁶ この受容の機能は、例えば *but* といった他の対照を表す談話標識と区別される特徴である。

2. 前の談話から導き出せる予想や効果が、これから来るメッセージにおいて打ち消されることを知らせる。

(Bell 2010: 1912, 1914, 1920)

1の受容の機能は、前方照応機能といえる。この2つの機能を(6)で考えてみる。

(6) A: Ted's so dumb

B: **Still** he got an A- in Phonology

(Bell 2010: 1920 [太字体は原著])

Bの*still*は、AのTedの知能についての評価の正当性を認める(前方照応する)一方で(ibid.: 20-21)、Aの発話から導き出せる想定(「Tedは音韻論の授業で良い成績をとることはできないだろう」)がこれから打ち消されようとしている(*he got an A- in Phonology*)ことを知らせている。また、Couper-Kuhlen and Thompson (2000)は、自然発生的な会話を分析し、譲歩が基本的に以下の連鎖(相互作用のパターン)の中で行われることを明らかにしている。

(7) 1st move A: States something or makes some point

2nd move B: Acknowledges the validity of this statement or point (the conceding move)

3rd move B: Goes on to claim the validity of a potentially contrasting statement or point

(Couper-Kuhlen and Thompson 2000: 328)

つまり、譲歩は(少なくとも)2人の話者(A, B)を要し、3つのムーブ(1st, 2nd, 3rd moves)より構成される連鎖の中で行われる。譲歩(2nd move)は、相手に対する潜在的に対立する意見を主張する(3rd move)ために行われるという(ibid.)。譲歩の発話が、基本的に(自分の発話ではなく)相手の発話(1st move)を契機として行われている点は興味深い。Pomerantz (1984)はまた、会話者は“potentially disruptive disagreement”をするために譲歩を行うと指摘している。

3つ目の機能は、「旧情報を導入する」機能(Bell 2010; Borkin 1980; Crupi 2004; 東森 2003; König and Traugott 1982)である。旧情報とは、既に確立されたポジションと言うこともできる。Hirtle (1977: 42)は、「*still*は、関係性を介在要素にもかかわらず継続として特徴づける」(傍点は筆者)⁷と指摘する。この3つ目の機能を考えるためには、

⁷ 原文は“*still* characterizes the relationship as continuation in spite of an intervening element” (Hirtle 1977: 42)。

(6)のようなやりとりのもう 1 つ前のターンも考慮する必要がある。(8)のように表せる。

- (8) B: P (旧情報)
 A: Q (介在要素)
 B: *Still* P' (旧情報の継続)

Still は (対立的な) 介在要素 Q の存在にもかかわらず、P (旧情報) が後続の P' で継続されることを知らせる (cf. Bell 2010: 1921, 1925-1926)。このように、*still* は Q への対立を示す (打ち消しを知らせる) と同時に、旧情報を導入する機能を持つ。*Still* の分析には、この情報の連続性も考慮し、(8) のような広範なコンテキストを見る必要がある。

3. 談話標識 *still* の行為構造における機能

以上の研究の背景を踏まえ、本節では、談話標識 *still* の行為構造における機能をデータ分析を通して明らかにする。

3.1. データと分析記号

データソースとして SOAP を使用する。SOAP は、2001 年から 2012 年までのアメリカのドラマ台本を収録する大規模コーパスである。*Still* の後ろに、が来るものと . が来るものを抽出するため、2 つの検索式 *still*.[r*], と *still*.[r*]. ([r*] は抽出される用例を副詞に限定する) を使用し、抽出された用例の中から離接的な発話頭用法と独立用法の談話標識 *still* を手作業で収集した。さらに、その中でも *still* がターン (turn) 冒頭で用いられているものに絞った。その理由は、譲歩が基本的に (6) や (7) で示したように 2 人のやりとりの中で用いられること、そして、ターン交替が行われる場所は、話者による様々な行為が行われる「行為構造」が関与する場所だからである。

2.2 節から、*still* の分析には広い談話の流れ (特に前文脈) を考慮する必要があることがわかった。以降の分析では、便宜上、*still* が現れる前後の発話を以下のように示し言及する。

- (9) 1 話者 B: P1 (ターゲットとなる主張)
 2 話者 A: Q1 (P1 に対する言い返し)
 3 話者 B: *Still*, P2. (P1 の再主張; P2 はないこともあり→独立用法)
 4 話者 A: Q2 (P1 の再主張に対する言い返しが多い)

P1, Q1, P2 は、先の (8) の P, Q, P' にそれぞれ相当する。また、1—2 のやりとりは繰り返されることもある。以下、「P1, P2, Q1, Q2 ...」と言及した場合、それらは話者のポジション (P, Q) が言語化された発言内容を指す。

3.2. 発話頭用法 *still* の行為投射機能

まず、発話頭用法 *still* を分析する。この *still* は、特定内容の後続部を投射し、産出されつつある発話が行う特定の行為を投射する機能があることを示す。

(10) は1つ目の例である。Adam が Stuart を助けられなかったことが話題となっている。

- | | | | |
|--------|--------|--|-----------|
| (10) 1 | Adam: | Stuart needed saving. I should have saved him. | P1 |
| 2 | Annie: | But you couldn't. | Q1 |
| 3 | Adam: | I couldn't because... of you. | |
| 4 | Annie: | You think it's my fault you couldn't save Stuart? | |
| 5 | Adam: | If you hadn't been in this house, I would have been | |
| 6 | | right here with Stuart. I would have taken that bullet | |
| 7 | | for him. | |
| 8 | Annie: | You were drugged and disoriented. I wasn't going | Q1 |
| 9 | | to just abandon you. | |
| 10 | Adam: | <i>Still</i> , I should have done it. | Still, P2 |
| 11 | Annie: | Listen to me, I am not going to let you do this to | Q2 |
| 12 | | yourself. | |

(All My Children 2009 SOAP)

Adam は Stuart を助けるべきだったと主張し (1行目)、助けられなかったことを Annie のせいにする (3, 5-7行目)。しかし Annie は、助けることはできなかったのだし (2行目)、混乱していた Adam を見捨てられなかった (8-9行目) と反論する。これに対し Adam (10行目) は、*Still, I should have done it* (それでも、自分は助けるべきだった) と1行目の主張 (P1) を繰り返している。*Still* は、これから Adam が行うそうした「対立 (conflict)」を投射 (project) している。林 (2008: 16) は、投射とは「次に何が起るか」を予告・予告する性質であり、「投射はある行為が完全に産出されてしまう前に、それがどのような行為なのか (中略) を予測することを可能にする」(ibid.[傍点は原著]) と指摘する。⁸ Adam の *still* は、P1 の再主張内容 (P2) が後続で述べられること (ここでは、P1 の *I should have saved him* が繰り返されている)、そして発話全体をもって行われる行為が「すでに主張したポジション (P) の再主張」であることを投射している。

Still の後続部では、前の発話の含意が述べられたり、言い換えがなされる場合も多い。

⁸ Auer (2005) はまた、投射を “the fact that an individual action or part of it foreshadows another” (ibid.: 8) と定義する。

しかしいずれの場合も、*still* は「すでに主張したポジションの再主張」を投射する。(11) (12) でそれぞれの例を見る。

- (11) 1 Lily: Are you overwhelmed right now?
 2 Greenlee: Uh, any reason that I should be? P1
 3 Lily: Well, we heard a loud sound and Aidan's friend Q1
 4 Steve disappeared and we're all alone in the
 5 strange place and is not a joke.
 6 Greenlee: *Still*, no reason to be overwhelmed. See, look at Still, P2
 7 me. I am totally whelmed.
 8 Lily: Greenlee, "whelmed" isn't a word. Q2
 (All My Children 2005 SOAP)

- (12) 1 Jonathan: They should include you in more of their P1
 2 decisions.
 3 Simone: Yeah, well, it's really all right. I get paid Q1
 4 the same.
 5 Jonathan: *Still*, you should get the credit you deserve. Still, P2
 6 Simone: You think? Q2
 7 Jonathan: I do.
 (All My Children 2005 SOAP)

(11) では、2 行目の Greenlee の発話は、単に「理由」を問う質問 (information question) ではなく、「自分が困惑するような理由なんてない」という Greenlee の対立心が含意された発話である。それは、Greenlee が Lily の質問 (1 行目) に答えるべき場所であえて聞き返していることから伝わる。しかし、Lily がその「理由」にあたる事柄を述べたため (3-5 行目)、Greenlee はそれに対抗している (6-7 行目)。*no reason to be overwhelmed* (P2) は、P1 の含意を述べた発言である。(12) では、Jonathan は P2 (*you should get the credit you deserve*) で、P1 のポジションを別の言い方で主張している。(11) と (12) のどちらにおいても、*still* は話し手が対話者のポジション (Q) に対立し、「自分のポジション (P) を再主張する」ことを予見させている。

(13) のように、*still* は対話者に好意的な対立を投射する場合もある。しかしこの場合も、*still* が「ポジションの再主張」を投射する点で変わりはない。

- (13) 1 Carmen: Are you serious? I really have the job?
 2 Babe: Yes. I really love the way you've been running the P1
 3 house, and we're in desperate need of help. So, yes,

- 4 the job is yours.
- 5 Carmen: Oh. This is incredible! Wait. What will I be doing?
- 6 Babe: Well, we need help on the phones. They have been
- 7 ringing off the hook.
- 8 (Phone-rings)
- 9 Babe: Go ahead.
- 10 Carmen: Hola. This is Fusion. Carmen at your service.
- 11 (To Babe) Wrong number. Q1
- 12 Babe: *Still*, you're like a natural. Still, P2
- 13 Carmen: Really? Q2

(All My Children 2008 SOAP)

2-4行目で Babe は、Carmen の切り盛りの仕方が気に入り、人手も必要なので Carmen に内定を決めたと述べる。その後 Babe の仕事内容が電話受付であると話した矢先、電話が鳴る (6-8 行目)。Carmen はその電話に対応するが、それが間違い電話であったことがわかる (10-11 行目)。しかし Babe は、*Still, you're like a natural* (それでも、あなたは適任のようだよ) と Carmen に好意的な発言をする。*Still* は、間違い電話という (ネガティブな) 介在要素が生じたが、それでも Babe が Carmen について好意的な発言を述べる (P1 のポジションを主張する) ことを予測させている。⁹

(14) では、*still* は二重の機能を果たしている。つまり、直前の対話者の発言に対する「反論」の投射と、「すでに主張したポジションの再主張」の投射である。この例では、Holden に抱いて欲しいと頼む Maeve と、それを拒否する Holden との間で対立が起こっている。

- (14) 1 Maeve: Make love to me.
- 2 Holden: Maeve-
- 3 Maeve: No. Please. I know what you're gonna say.
- 4 Can you do it for me? Just I want to know once
- 5 in my life what it's- what it's like to make love
- 6 to a good man, please.
- 7 Holden: You will. But it can't be me.
- 8 Maeve: But you're the only one here. P1

⁹ 発話頭用法と独立用法 (ターン冒頭での使用) を合わせた談話標識 *still* の用例は全部で 1434 例見つかったが (cf. 3.4 節)、その中で好意的な対立を示す例は 56 例 (4.53%) であった。この結果から、*still* が好意的な感情を持って発話されることは少なく、それは有標的な使用であるといえる。

- 9 Holden: Maeve, when we get out of here, we're gonna meet Q1
 10 plenty of good men. I promise you, you're gonna
 11 have a life that you've always dreamed of.
 12 Maeve: I wish I could believe you. P2
 13 Holden: Ask anyone. I never lie. Q2
 14 Maeve: *Still*, you're the only one here. Still, P3
 15 Holden: See? It's unanimous. Q3
 16 Maeve: Okay. Just- et's just say we get out of here.
 17 What do we do about Eb?

(As the World Turns 2009 SOAP)

まず、直前の対話者の発話への「反論」の投射機能を見る。*Still* を含む発話とそれに隣接した発話に着目する。

- (14') 13 Holden: Ask anyone. I never lie. Q
 14 Maeve: *Still*, you're the only one here. P
 15 Holden: See? It's unanimous. Q

「自分の言うこと (9-11 行目) は正しいから、誰でもいいから聞いてみな」と主張する Holden (13 行目) に対し、Maeve は「ここにはあなたしかいない (のだから、聞ける人なんていない)」と反論する (14 行目)。Maeve の *still* は、「聞いてみなと言うけど、あなたしかいない (から聞けない)」という対立を示し、Holden に対する「反論」を投射している。その反論を受け Holden は、「ほら、全員賛成だ (から自分の言うこと (9-11 行目) はやはり正しい)」と反論し返している (15 行目)。一方で、この *still* はより広範なやりとり (構造) 上の機能も果たしている。14 行目の Maeve の発話は、8 行目 (P1) の再主張と解すこともでき、この場合 *still* は (先の例で見てきたような) 「ポジションの再主張」を投射している。(14'') のような構造になっている。

- (14'') 7 Holden: it can't be me.
 8 Maeve: But you're the only one here. P1
 :
 13 Holden: Ask anyone. Q2
 14 Maeve: *Still*, you're the only one here. Still, P3

7-8 行目のやりとりで、「(君を抱くのは) 自分じゃない」と言われた Maeve は、「でもここにはあなたしかいない」と反論した。そしてその後、13 行目で「誰にでも聞いてみな」と言われ、「でもやっぱり、ここにはあなたしかいないじゃない」と P1 のポジションを再

度主張している。東森 (2003: 4-5) は、談話連結詞 (本稿の言う談話標識) *but* は新情報を導入するのに対し、*still* は通例聞き手が既に知っている旧情報を導入すると指摘する。8行目で *but* が使われ、14行目で *still* が使われている点に注目したい。*Still* は既出の情報である *you're the only one here* を繰り返すために用いられ、「ポジションの再主張」を投射しているといえる。¹⁰

以上の分析から、発話頭用法 *still* には後続部 (ポジションの再主張内容) を投射し、話し手が産出されつつある発話をもって「すでに主張したポジションの再主張」の対立行為を行うことを投射する機能があることがわかった。

3.3. 独立用法 *still* の行為遂行機能

次に、独立用法 *still* を分析する。この *still* は後続部の投射機能を持たず、それが推論されることで、「すでに主張したポジションへの固執」という対立行為を遂行することを示す。

(15) では、Tammy と Sandy が共通の知人である「彼」について話している。

- | | | | |
|--------|--------|---|-------------|
| (15) 1 | Tammy: | He wants to be friends. | P1 |
| 2 | Sandy: | He wants to trouble us and remind us that | Q1 |
| 3 | | he's much, much cooler than we are. | |
| 4 | Tammy: | No, I saw something else. He's lonesome, Sandy. | P2 |
| 5 | Sandy: | He brought that on himself. | Q2 |
| 6 | Tammy: | <i>Still</i> . | Still (P3). |
| 7 | Sandy: | Don't give in to him, Tammy. | Q3 |

(Guiding Light 2005 SOAP)

Tammy (4行目) は「彼」は寂しいのだと主張するが、Sandy に自業自得だと言いつ返されたため (5行目)、*Still*. (それでもよ) と自分のポジションに固執している。*Still* が伝達するメッセージ (P3) は、例えば (15') で示すように推論 (再建) 可能である。

- (15') 6 Tammy: *Still* [I saw something in him].
P3

P3 のようなメッセージが話し手の推意 (含み) として聞き手に容易に解釈されることで、*still* はそれだけで話し手の言いたいことを伝える完結した (self-contained) 発話となり、「ポジション P への固執」の対立行為を遂行 (perform) する。7行目では、Sandy は次の

¹⁰ この例のように談話標識が二重の役割を果たすことは、先行研究でも示されている (e.g., Schiffrin (1987: 155-156) の *but* の分析)。

発言に移りさらに言い返しており、*still* が「固執」の行為を完了した発話と認識されたことが示されている。

(16) では、聞き手が *still* の伝えるメッセージを解釈したことが発言内容からわかる。

- (16) 1 Harley: She's here. Eden is here. She's back.
 2 Gus: You didn't kick her out of the house? P1
 3 Harley: No, of course, not. That's stuff with Phillip Q1
 4 and Zach is settled. None of that matters
 5 anymore.
 6 Gus: *Still*. *Still*, *still*. Still (P2). *Still*, *still* (P2).
 7 Harley: *Still* nothing. Q2

(*Guiding Light* 2003 SOAP)

Gus (2 行目) は、Harley に「彼女」を家から追い出さなかったのかと尋ねる。この質問には「追い出すと思っていたのになぜ」という Gus の驚きが含まれている。しかし Harley が追い出さなかったと答え、「Phillip と Zach のこと（「彼女」を追い出す要因）は解決したからもう問題ない」と述べたため、Gus は *still*。（それでもさ）と P1 のポジションに固執している。さらにその後で、*Still*, *still*。（それでも、それでもさ）と発話頭用法 *still* とメタ的な独立用法 *still* を述べる。注目したいのは、次の Harley の発話 *Still nothing* である。それは、「P1 のさらなる主張はないのだ」と Gus の独立用法 *still* が伝える P2 の存在を否定しており、Harley が P2 を推論したことがわかる。

しかし中には、聞き手の聞き返しが起こることで、*still* が伝えるメッセージが後から開示されるケースも見られた。(17) はその一例である。Sami の元恋人で Arianna の兄でもある「彼」が話題となっている。

- (17) 1 Arianna: You really don't know where he is, do you? P1
 2 Sami: No. But I don't know why that's such a big Q1
 3 surprise to you. I mean... we're broken up.
 4 Arianna: *Still*. Still (P2).
 5 Sami: *Still* what?
 6 Arianna: Don't you get it? My brother is in love with P2
 7 you, Sami.

(*Days of Our Lives* 2009 SOAP)

1 行目の Arianna の質問には、「恋人だったのだから彼の居所を知っていて当然なのに」という Arianna の Sami に対する不服が含意されている。しかし Sami が知らないと答え、なぜそれがそれほど驚くことなのかと対抗したため (2-3 行目)、Arianna は *Still*。（そ

れでもよ)と P1 のポジションに固執する。これに対し Sami は、*Still what?* と聞き返す。それは、*still* の伝えるメッセージ (P2) がわからずそれを確認している質問とも取れるが、「まだ、何なのよ」という Sami の多少の苛立ちや詰問を含んだ聞き返しとも解釈できる。その応答として、Arianna は 6-7 行目を述べており、それは、「(だから) 兄の居所を知っていて当然よ」という P1 のポジションを再主張する P2 である。

(18) も同様の例である。Nicole と子供を失った E.J. の会話である。

- | | | | |
|--------|---------|--|-------------|
| (18) 1 | E.J.: | I've been impossible lately. I'm so sorry. | P1 |
| 2 | Nicole: | Oh, EJ ... how could you not be impossible? | Q1 |
| 3 | | I mean, losing a child that you never even got to | |
| 4 | | meet. It's- It's a terrible trauma, and I know that. | |
| 5 | E.J.: | <i>Still.</i> | Still (P2). |
| 6 | Nicole: | What? | |
| 7 | E.J.: | I just- I don't see why it had to be such a ... | P2 |
| 8 | | tortuous ordeal. | |
| 9 | Nicole: | What do you mean? Why ... why wouldn't it? | Q2 |

(*Days of Our Lives* 2009 SOAP)

自分は最近どうしようもないと言う E.J. (1 行目) に、Nicole は子供を失うのは大変な精神的ショックだと同情する (2-4 行目)。しかし E.J. が *Still.* で P1 のポジションに固執したため、Nicole は *What?* と聞き返している (6 行目)。ここでは *what* に *still* が前置しておらず、「これだけ言ってあげているのに、次は何?」という Nicole の (多少の) 苛立ちを含んだ聞き返しとして解釈できる。7-8 行目の E.J. の応答 (P2) では、「(だから) 私はどうしようもない」という P1 のポジションが主張されている。

以上の分析から、独立用法 *still* は話し手のメッセージを暗示的に伝達し、「すでに主張したポジションへの固執」の対立行為を遂行することがわかった。しかし中には、聞き手の聞き返しが起こることで、メッセージが後から開示される場合もあることを示した。

3.4. 独立用法 *still* の行為投射的使用

独立用法 *still* には、対立行為を「投射」する例も見られた。紙幅の関係上、そのような用例を 1 つだけ考察する。(19) は、Chelsea が Bo の車で事故を起こしてしまった後の会話である。

- | | | | |
|--------|----------|---|----|
| (19) 1 | Chelsea: | ... you must think that I'm the biggest loser | P1 |
| 2 | | in the world. | |
| 3 | Bo: | Oh, come on, stop it. It was a little accident. | Q1 |

- 4 It happens to everyone.
- 5 Chelsea: *Still*. I mean, you totally went out on a limb Still. I mean, R
- 6 for me. You signed my temporary license,
- 7 you even let me borrow your car,
- 8 and then I go out and I hit something. I don't P2
- 9 even know what it was or how it happened.
- 10 Bo: There's a lot of black ice out there tonight. Q2
- (*Days of Our Lives* 2006 SOAP)

自分は落ちこぼれだと自己卑下する Chelsea (1-2 行目) を、Bo はよくあることだからと慰めている (3-4 行目)。つまり、自虐された Chelsea のポジティブフェイス (Brown and Levinson 1987) が、Bo によって回復されている。このために、Chelsea はそれへの返礼として Bo にもポジティブフェイスを与える必要性が生じた。それが *still* の後の前半部分 (*I mean, you totally ... your car*) でなされており、Bo が Chelsea のためにしてくれたことが言及されている。(19') のように図式化できる (*you totally ... your car* の部分を R で示す)。

- (19') 1-2 C: P1 (自己のポジティブフェイスの侵害)
- 3-4 B: Q1 (C のポジティブフェイスの救済)
- 5-9 C: *Still, I mean, R, and P2*
 (B にポジティブ
 フェイスを与える)

R の後の部分 (8-9 行目) では、1-2 行目 (P1) の言い換えとも取れる発言、つまり P2 が述べられている。このように、Chelsea は *I mean, R* と補足してから (Bo にポジティブフェイスを与えてから)、P2 を述べ P1 の再主張を行っている。*Still* は、ターン冒頭に (最初のターン構成単位として) 位置し、Chelsea が行うそうした行為の「早期の投射」(事前予告) を行っている。つまり、話し手は *still* を発言し、P2 の産出 (ポジション P の再主張) をすることを投射しておくことで、相互作用上先に行うことが必要となった R の産出をするためのターンスペースを確保しているのである。¹¹ (19'') のように図式化できる。

¹¹ この部分の分析は、林 (2008) を参考にした。

(19") 5 Chelsea: *Still*. I mean, you totally went out on a limb Still. I mean, R
 6 for me. You signed my temporary license,
 7 投射
 8 and then I go out and I hit something. I don't P2
 9 even know what it was or how it happened.
 10 Bo: There's a lot of black ice out there tonight. Q2
 (*Days of Our Lives* 2006 SOAP)

10 行目で Bo が再び Chelsea をかばう発言（ポジション Q の再主張）をしており、ここから、5-9 行目の発言をもって Chelsea の対立行為が完了したと認識されていることがわかる。

このように、独立用法 *still* は、行為投射のために使用される場合もある。しかし、その使用は (19) で見たポライトネス的な事情への対処といった特定の語用論的事象と不可分に現れるように思われ、生起環境が限定的である。また、そうした使用は数例しか観察されず (cf. 3.4 節)、*still* に確立した使用（機能）と言うよりは、相互作用レベルのテクニクと考えられるかもしれない。

3.4. 分析のまとめ

3 節では、談話標識 *still* の発話頭用法と独立用法の行為構造における機能を分析した。結果は表 1 のようにまとめられる。

用法	行為構造における機能	例	頻度 (割合)	
発話頭用法	対立行為の 投射	(10) (11) (12) (13) (14)	1344 例 (93.7%)	1434 例 (100%)
独立用法	対立行為の 遂行	(15) (16) (17) (18)	78 例 14 例 (5.7%)	
	投射	(19)	8 例 (0.6%)	

表 1：SOAP に見る談話標識 *still* の用法と行為構造における機能

発話頭用法 *still* は、後続部（ポジションの再主張内容）を投射し、産出されつつある発話が行う対立行為、すなわち「すでに主張したポジションの再主張」を投射した。これは、小野寺 (2014: 18-20 他) が提案する「左の周辺部（発話頭）の談話標識がこれから行われる行為を知らせる」機能に相当するといえる (cf. 1 節)。発話頭用法と独立用法（ターン冒頭での使用）を合わせた談話標識 *still* の用例は全部で 1434 例見つかり、その中で発話頭用法は 1344 例 (93.7%) を占めていた。一方で、独立用法 *still* は、それが伝えるメッセージが推意として解釈され、「すでに主張したポジションへの固執」の対立行為を遂行

(After Rosa Parks 1995 COHA)

- c. “Well,
- still*
- ,” the man said doggedly, “I think I’ll just ...

(Morgan’s Passing 1980 COHA)

- d. “But
- still*
- .” Persephone flicked an ear back to ...

(Untamed: a house of night novel 2008 COHA)

そこで、まずは SOAP から集めたデータを対象に、各用法の *still* の共起語を調べ、生起パターンを特定した。表 2 は、各用法の上位 4 パターン (計 8 パターン) を提示している。

	発話頭用法	素頻度	独立用法	素頻度
1	<i>Still</i> ,	858	<i>Still</i> .	50
2	<i>But still</i> ,	199	<i>But still</i> .	10
3	<i>Well, still</i> ,	109	<i>Yeah, but still</i> .	6
4	<i>Yeah, but still</i> ,	64	<i>Well, still</i> .	4
	合計	1150		70

表 2：SOAP における談話標識 *still* の共起パターン

COHA では、この 8 つのパターンの先頭に引用符をつけた検索式を使用した。抽出された用例の中から、対象となる例を手作業で収集した。今回の調査では *Still*, と *Still*. の 2 つに加えて、より多様な例を見る目的で他の語句が付随した用例も調査することにした。表 2 は、興味深い結果を提示している。両用法とも *still* が単独で用いられる場合が圧倒的に多く、次に *but* との共起が多い。また、順位の逆転があるものの、どちらも *well* と *yeah, but* との共起が 3, 4 位となっている。この結果から、2 つの用法に何らかの発達上の関係があることが推測できる。¹³

表 3 は COHA の分析結果であり、談話標識 *still* の用法の史的発達をまとめたものである。なお、数値は各年代における各パターンの素頻度を表している。太字ではない数値は発話頭用法、太字の数値は独立用法の生起数を表している。¹⁴

¹³ また、*yeah* と *well* は談話構造化標識 (discourse structuring marker) (Fischer 2010) や非優先的応答 (dispreferred response) (Schegloff 2007: 63-73) の特徴に相当しそうである。こうした語との共起やコロケーションの問題については今後検証していきたい。

¹⁴ *Yeah, but still*, については、先頭に引用符を付けて検索したところ用例が得られなかった。そこで、引用符を付けずに検索したところ、演劇の台本から 1 つ用例が得られた (FUTHER LUX *Yeah, but still, it’s over. [Our Lady of 212st Street 2002 COHA]*). *Yeah, but still*, に引用符がついていないのはこの理由による。また、*Still*. から発話頭用法が 4 例見つかっているが、それらは “*Still ... she died of monoxide gas,*” (Ill Met By Moonlight 1937 COHA) のように *still* の後にポーズ (...) が続いている例である。

年代	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	合計
パターン																					
"Still,		5	8	12	17	25	26	37	30	32	48	55	36	36(1)*	48	451	342	601	3512	5513	6449(1)
"But Still,					5		2	1	1	1		1	3	2		6	3	6		2	33
"Well, still,																1		1	1	1	212
Yeah, but still,																				1	1
"Still.													1		1	1	2	111	4	2	419
"But still.																	1		1	1	3
"Yeah, but still.																					0
"Well, still.																					0
合計	発話頭	5	8	12	22	25	28	38	31	33	48	56	40	38	49	53	37	68	35	58	684
	独立													(1)		5	2		8	7	23(1)
																					708

* (1) は発話頭用法とも解釈可能な例

表 3 : COHA に見る談話標識 *still* の用法の史的発達

表 2 と表 3 の結果、すなわち SOAP (2001-2012) と COHA (1810-2009) を比較し、発話頭用法と独立用法の出現数が通時的にどのように変わってきたかを調べる。しかし 1 つ問題となるのは、SOAP の期間が COHA の期間ほとんど重複する点である。そこで、COHA (表 3) から「2000s」の部分を除いた数で COHA の部分集合をつくり、SOAP と COHA (の部分集合) における 2 用法の出現頻度を比較した。表 4 のクロス表に示す。

表 4 : SOAP と COHA における 2 用法の出現頻度

	発話頭用法	独立用法
COHA	626	17
SOAP	1150	70

N = 1863

表 4 にカイ二乗検定を施したところ、1% 水準で有意であった ($\chi^2(1) = 8.372, p < .01$)。さらに、残差分析によって個々の度数の効果を調べたところ、4 つの数値すべてが 1% 水準で有意であり、具体的には、「相対的に、COHA で発話頭用法が多く、SOAP で独立用法が多い」ことを示す結果を得た。¹⁵ このことは、独立用法がここ 20 年程度の近い時代において発達しているということを明確に示している。

表 3 から、独立用法は 1960 年代ないし 1970 年代ごろからよく使われるようになったことがわかる。注目したいのは、その用法の初出が *Still*, のパターンから見つかり、またそのパターンから 10 例 (1 例は曖昧な例) 得られたことである。つまり、発話頭用法で最も多く用いられてきたパターンから独立用法が始まり、多くの用例が観察された。また、*Well, still*, の独立用法の 2 例を合わせると、*still* にカンマが続くパターンによる独立用法は半数を占める。4.2 節では、この旧用法、つまり、(発話頭用法のように) カンマが続くが独立用法の機能を持つ *still* を見る。

¹⁵ 統計処理は js-STAR version 8.9.3j で行った。http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/freq/chisq_ixj.htm#

4.2. 独立用法 *still* の旧用法

(21) は、1960年代から見つかった用例である。

- | | | |
|--------|---|-------------|
| (21) 1 | On Monday she told Mr. Valerio that working in Dale's | P1 |
| 2 | Dairy Bar at night and having band practice in the | |
| 3 | afternoons wasn't giving her time enough to study. | |
| 4 | "But we finish by four-thirty." | Q1 |
| 5 | " <i>Still</i> ," she said, looking away. | Still, (P2) |
| 6 | "But you managed last year, Lucy. And on the honor roll." | Q2 |

(*When She Was Good* 1967 COHA)

Still (5行目)にはカンマが続いているが、その後続部 (P2) は産出されていない。1-3行目から、Lucy (*still* の話者) は、夜はバーで働き午後はバンドの練習をしているために十分な勉強時間がとれないという不平 (P1) を述べたことがわかるが、Mr. Valerio に反論されてしまったため (4行目)、*still* で P1 のポジションに固執している。6行目で聞き手 (Mr. Valerio) は、*still* をその行為 (およびターン) を完了した発話と認識して次の発言 ("*But you managed ...*") に移っていると読むことができる。この *still* は独立用法の機能を持つといえる。

(22) は、1980年代からの用例である。ここでは *Still*, と *Still*. の両方による独立用法が見られる。レアド (Lared) とその父親が「あの人たち」について話している。なお、紙幅の関係上、途中一部を省略してある。¹⁶

- | | | |
|--------|--|-------------|
| (22) 1 | "Let them stay. Please." | P1 |
| 2 | Father's expression darkened, and he pulled the bar | |
| 3 | from the fire and again began to beat it into a sickle. | |
| 4 | "They talk with your voice, Lared." | Q1 |
| | : | |
| | : (複数行に渡る父親の反対) | |
| | : | |
| 5 | " <i>Still</i> ," said Lared. He handed the whetstone to his | Still, (P2) |
| 6 | father, to work an edge onto the iron. | |
| 7 | "Still what?" | |

¹⁶ COHA が提示するこの用例の書誌情報が間違っていた。COHA では書名は *The Worthington Chronicle* となっているが、正しくは *The Worthing Chronicle* である。なお、当小説は現在絶版であり、*The Worthing Saga* (1990) (Orson Scott Card 作) の一部として収録されている。

- 8 “*Still*. If they want to stay, how can you stop them?” Still (P2). P2
 9 “Do you think I’d let them stay from fear?” Q2
 (*The worthington chronicle* 1983 COHA)

「あの人たちを置いてあげて。おねがい」¹⁷ (1行目) とレアドが頼むが、父親は反対する (4行目とそれ以降)。レアドはそれに *Still*, (5行目) と述べ P1 のポジションに固執している。そしてその後の地の文から父親に砥石を渡していることがわかり、この行動からレアドの固執の (発話) 行為が *still* の発言をもって完結したことがわかる。しかし父親が *Still what?* と尋ねたため (7行目)、レアドは *Still*. (でもはでもだよ) とメタ的に固執を繰り返している (8行目)。その後で P2 (*If they want to stay, how can you stop them?*) を述べており、それは、「きっと止められないだろうから、あの人たちを置いてあげて」という P1 のポジションに固執する発言である。

こうした用例が早期に多く観察されることは、独立用法が発話頭用法から発達していったことを裏付ける一つの証拠となる。繰り返さなくても容易に想起してもらえると判断したメッセージを、後続部として投射せずに収める表現法として、独立用法が分化していったと考えていいように思われる。また、(22) は (17) と (18) で見たような、聞き手の聞き返しが起こることで *still* のメッセージが開示されていく例であるが、このタイプの用例はこの一例しか見つからなかった。さらに、3.3 節で見た独立用法の行為投射的使用は一例も見られず、現代 (SOAP) のデータからも数例しか観察されなかった事実を合わせると (cf. 3.4 節)、それは現代のかなり後になって生じた新たな使われ方なのではないかと推察できる。現代英語において独立用法 *still* が機能上、分化の途上にあるとも言えるかもしれない。

以上の分析により、談話標識 *still* は、後期近代英語から現代英語にかけて発話頭用法から独立用法を発達させてきたことを示した。そして重要なのは、この発達が、*still* の「行為投射をする形式から行為投射と行為遂行の両機能を担う形式への変化」である点である。4.3 節では最後に、この *still* の行為構造における機能の発達について考察する。

4.3. 談話標識 *still* の語用論的機能の拡張

談話標識 *still* の機能発達を考察するにあたり、まずは副詞 *still* が古英語からどのように発達してきたかを観察する。König and Traugott (1982) は、*still* が図 2 のような意味変遷を遂げてきたことを明らかにしている。

¹⁷ この例の日本語訳は、オースン・スコット カード (著) / Orson Scott Card (原著) / 大森 望 (訳) 『神の熱い眠り』 (ハヤカワ文庫 SF—ワーシング年代記、1995/5) から引用した。

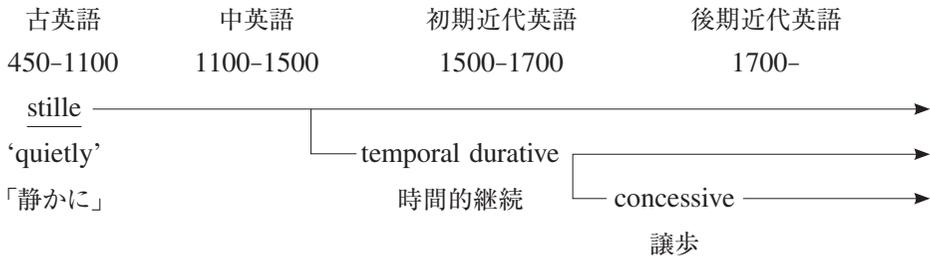


図 2：副詞 *still* の意味変遷 (König and Traugott 1982: 173[日本語は筆者])¹⁸

古英語ではもっぱら ‘quietly’ を意味していた *still(e)* が、中英語になると時間的意味を獲得し、さらに初期近代英語で譲歩の意味を持つようになる。譲歩への意味拡張は、事実を描写する客観的意味（時間的継続）から話し手の主観的態度や評価を表す意味への発達であり、守屋（2007: 5-6）はこれを文法化の特徴である主観化（subjectification）（Traugott 1988; Traugott and Dasher 2002）であると指摘する。それは、語用論的意味（連結的（textual）意味・表出的（expressive）意味（Traugott 1982, 1989; cf. Brinton 1996））を獲得する変化と言うこともできそうである。さらに、*Oxford English Dictionary*（以下 OED）を調べると、*still* はもともと節内副詞から始まっていることがわかる（OED, s.v. *still*, adverb）。

これらの知見に前節までの分析結果を合わせると、*still* の意味・機能の発達を以下のように図式化できる。



図 3： *Still* の意味・機能の発達

¹⁸ 原文では “quietly” とダブル引用符が使われているが、本稿ではシングル引用符を用いる。

客観的意味（‘quietly’）を持つ動詞を修飾する節内副詞であったということは、*still* は当初語用論的力を持たなかった。しかし、譲歩の意味を獲得することでその力を得る。さらに、談話標識 *still* が発話頭用法から独立用法を発達させることで、対立行為を投射する形式から投射と遂行の両方を行う形式へと発達する。この行為構造における機能の発達は、*still* の語用論的機能の拡張と行うことができるだろう。また、もし 3.3 節で見たような独立用法の行為投射の使用が確立していくならば、それは *still* のさらなる機能拡張と言えるかもしれない。

5. 結語

本稿では、アメリカ英語を対象とし、談話における相互作用の観点から談話標識 *still*（発話頭用法と独立用法）の行為構造における機能を明らかにした（3 節）。発話頭用法 *still* は、「すでに主張したポジションを再主張する」という話し手の対立行為を投射する機能を持つ一方で、独立用法 *still* はそうした行為を遂行することがわかった。また、独立用法 *still* の中には行為投射をするものも観察されたが、その使用は生起環境が限定的であり、また数例しか観察されなかったことから、*still* に確立した使用（機能）であるかはさらなる検証が必要である点も論じた。通時的調査（4 節）では、談話標識 *still* は後期近代英語から現代英語にかけて発話頭用法から独立用法を発達させ、ここ 20 年程度の近い時代において独立用法を増加させていることを示した。そして、この変化は *still* が行為投射をする形式から投射と遂行の両方を行う形式へと発達した変化であり、それが語用論的機能の拡張であると論じた。

本研究により、相互作用の観点からの通時的語用論研究の一ケーススタディを提供することができた。談話標識 *still* の機能は連鎖（文脈）に依存的であり、話者たちのやりとりを前提として実現する。その新たな用法・機能が相互作用を基盤として生じていった可能性を示した。今後の課題としては、本稿が明らかにした *still* の発達プロセスが既存の理論（例えば文法化や語用論化）の枠組みでどのように説明されるか（あるいはされないのか）を検討すること、そして、それらのプロセスが他の言語形式にも同様に見られるかを検証することなどが挙げられる。

参考文献

- Auer, P. 2005. "Projection in Interaction and Projection in Grammar." *Text* 25(1), 7-36.
- Beeching, K. and U. Detges (eds.). 2014. *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*. Leiden: Brill.
- Bell, D. M. 1998. "Cancellative Discourse Markers: A Core/Periphery Approach." *Pragmat-*

- ics 8(4), 515–541.
- Bell, D. M. 2010. “*Nevertheless, Still, and Yet: Concessive Cancellative Discourse Markers.*” *Journal of Pragmatics* 42, 1912–1927.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Borkin, A. 1980. “On Some Conjunctions Signaling Dissonance in Written Expository English.” *Studia Anglica Posnanensia* 12, 47–59.
- Brinton, L. J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Couper-Kuhlen, E. 2011. “Grammaticalization and Conversation.” In Narrog, H. and B. Heine (eds.) *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, 424–437. Oxford: Oxford University Press.
- Couper-Kuhlen, E. and S. A. Thompson. 2000. “Concessive Patterns in Conversation.” In Couper-Kuhlen, E. and B. Kortmann (eds.) *Cause-Condition-Concession-Contrast: Cognitive and Discourse Perspectives*, 381–410. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Crupi, C. D. 2004. *But Still a Yet: The Quest for Constant Semantic Value for English “Yet.”* Unpublished Ed Doc dissertation, Graduate School of Education: Rutgers University.
- デクラーク, レナート/安井稔 (訳). 2011. 『現代英文法総論』、東京：開拓社.
- Fischer, K. 2010. “Beyond the Sentence: Constructions, Frames, and Spoken Interaction.” *Constructions and Frames* 2(2), 185–207.
- Fraser, B. 1996. “Pragmatic Markers.” *Pragmatics* 6(2), 167–190.
- Fraser, B. 2009. “An Account of Discourse Markers.” *International Review of Pragmatics* 1, 293–320.
- Grosz, B. and C. L. Sidner. 1980. “Attention, Intentions, and the Structure of Discourse.” *Computational Linguistics* 12, 175–204.
- Günthner, S. 2016. “Concessive Patterns in Interaction: Uses of *Zwar ... Aber* (‘True ... But’)-Constructions in Everyday Spoken German.” *Language Sciences* 58, 144–162.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London; New York: Longman Group.
- Hansen, Maj-Britt M. 2008. *Particles at the Semantics/Pragmatics Interface: Synchronic and Diachronic Issues: A Study with Special Reference to the French Phasal Adverbs*. Amsterdam: Elsevier.
- 林誠. 2008. 「相互行為の資源としての投射と文法—指示詞『あれ』の行為投射的用法をめぐって—」、『社会言語科学』10(2)、16–28.
- Higashiizumi, Y. 2016. “The Development of Confirmation/Agreement Markers Away from the PR in Japanese.” *Journal of Historical Pragmatics* 17(2), 282–306.
- 東森勲. 2003. 「シェークスピアの作品における談話のつなぎ語の意味と文法化」、『談話連結詞の通時的研究：文法化を関連性理論で説明』、1–22、龍谷大学：東森勲.

- Hirtle, W. H. 1977. "Already, Still, and Yet." *Archivum Linguisticum* 8, 28-45.
- Jacobs, A. and A. H. Jucker. 1995. "The Historical Perspective in Pragmatics." In Jucker A. H. (ed.) *Historical Pragmatics. Pragmatic Developments in the History of English*, 3-33. Amsterdam: John Benjamins.
- König, E. 1977. "Temporal and Nontemporal Uses of *Noch* and *Schon* in German." *Linguistics and Philosophy* 1, 173-198.
- König, E. and E. C. Traugott. 1982. "Divergence and Apparent Convergence in the Development of *Yet* and *Still*." In Macaulay, M., O. Gensler, and C. Brugman (eds.) *Proceedings of the Eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 170-179. Berkeley, California: Berkeley Linguistics Society.
- Michaelis, L. A. 1993. "'Continuity' across Three Scalar Domains: The Polysemy of Adverbial *Still*." *Journal of Semantics* 10, 193-237.
- 守屋哲治. 2007. 「継続相を表す副詞の意味拡張パターンの研究：認知言語学・言語類型論の観点から」、『金沢大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』56、1-12.
- 大橋浩. 2015. 「譲歩への変化と譲歩からの変化」、『日本認知言語学会論文集』15、18-30.
- Ohori, T. 1998. "Close to the Edge: A Commentary on Horie's Paper." In Ohori, T. (ed.) *Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives*, 193-197. Tokyo: Kurosio Syuppan.
- Ohori, T. 2000. "Framing Effect in Japanese Non-Final Clauses: Toward an Optimal Grammar-Pragmatics Interface." In Juge, M. L. and J. L. Moxley (eds.) *Proceedings of the Twenty-Third Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 471-480. General Session and Parasession on Pragmatics and Grammatical Structure.
- 小野寺典子. 2014. 「談話標識の文法化をめぐる議論と『周辺部』という考え方」、金水敏・高田博行・椎名美智（編）『歴史語用論の世界』、3-27、東京：ひつじ書房。
- 小野寺典子（編）. 2017a. 『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』、東京：ひつじ書房。
- 小野寺典子. 2017b. 「語用論的調節・文法化・構文化の起る周辺部—『こと』の発達を例に」、小野寺典子（編）『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』、99-118、東京：ひつじ書房。
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 2005. 7th edn. Oxford: Oxford University Press.
- Oxford English Dictionary*. 2005. Oxford: Oxford University Press. 3rd edn available online at <http://www.oed.com>.
- Polanyi, L. and R. Scha. 1983. "The Syntax of Discourse." *Text* 3, 243-281.
- Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes." In Atkinson, J. M. and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of*

- the English Language*. London: Longman.
- Redeker, G. 1990. "Ideational and Pragmatic Markers." *Journal of Pragmatics* 14, 367-381.
- Rissanen, M. 1986. "Variation and the Study of English Historical Syntax." In Sankoff, D. (ed.) *Diversity and Diachrony*, 97-109. Amsterdam: John Benjamins.
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子. 2017. 「周辺部研究の基礎知識」、小野寺典子（編）『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』、3-54、東京：ひつじ書房.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E. C. 1982. "From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization." In Lehman, W. P. and Y. Malkiel (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E. C. 1988. "Pragmatic Strengthening and Grammaticalization." In Axmaker, S., A. Jaissner, and H. Singmaster (eds.) *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 406-416. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Traugott, E. C. 1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language* 65, 31-55.
- Traugott, E. C. 2003. "Constructions in Grammaticalization." In Joseph, B. D. and Richard D. J. (eds.) *The Handbook of Historical Linguistics*, 624-627. Oxford: Blackwell.
- トラウゴット, エリザベス・クロス/柴崎礼士郎 (訳). 2017. 「『周辺部』と同領域に生起する語用論標識の構文的考察」、小野寺典子（編）『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』、75-98、東京：ひつじ書房.
- Traugott, E. C. and R. B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change* (Cambridge Studies in Linguistics 96). Cambridge: Cambridge University Press.

コーパス

- The Corpus of Historical American English 1810-2009*(COHA), Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies).
- The Corpus of American Soap Operas 2001-2012*(SOAP), Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies).